Musica pacis et guerrae：戦争と平和の音楽
—皇帝カルロス5世の入市式にみる王権の音楽表象

上　尾　信　也

ピーター・バークは『目撃：歴史的証拠としての図像の使用』で、図像学上の解釈問題をも含む宗教画や肖像画から近代の写真や映像といった図像資料の具体例を挙げ、他の歴史的証拠の中での図像資料を、特定の歴史の意味と影響の「反映」として位置付けようとしている。つまり、図像そのものの歴史資料としての意味と、それにもまして図像を作成するという行為に「歴史」観の反映を見ているのである[1]。本稿では、この図像資料を含めた非文献資料の活躍の場を中世後期から近代初期の王権による祝祭儀礼に置き、とくに図像と並ぶ芸術的表象である音楽の政治的象徴的機能を、皇帝カルロス5世の入市式を中心に考察していく。

1. 祝祭本の中の祝祭儀礼と音楽

a) 図像研究

ヨーロッパ中世を対象とした図像研究の成果は、文献資料を網羅したフリードマンとウェグマン編『中世の図像学：研究ガイド』から窺い知ることができる[2]。同書の対象は中世世界の森羅万象にわたっており、事物からイマジェリー（心象）や伝統といった表象図像までを分類している。表象を個人にせよ集団にせよある人間の意思が何らかの形となって表現された創造物と考えるならば、まさに同書にみる細目像をきっかけに、バークの述べた歴史資料そして歴史観の反映としての複合的視野に立った対象として祝祭の図像学研究が求められる。また同時に祝祭は、政治史や経済史のみならず社会史、文化史、芸術学、文化人類学など総合的な研究分野によって分析される歴史研究上の重要な対象であることは論を待つまい[3]。

最近の主だった研究のみをあげても、祝祭はいかに中世後期から近代初頭にかけての社会そのものの分析に欠かせない資料かが認知されていると同時に、支配者にとっての意義、被支配者にとっての意義、社会制度や歴史的伝統に残す意義から検討されている[4]。

b) 入市式の音楽と図像

祝祭においてもとりわけ、歴史研究上の格好の政治的舞台装置として脚光を浴びるのが、中世後期の入市式と呼ばれる一連の王権の儀礼祝祭であろう。入市式は実質的な統治手段や軍事行動としての役割から、王個人あるいは王権の偶像視を最終的な目的とする示威行為としての

役割を課せられた儀礼であった。後者の役割においては、洋の東西を問わず古代以来継承されてきた政治軍事上の凱旋式の象徴的機能がさらに増して意識されるようになるのだが、本稿で触れるルネサンスの政治文化という土壌がここにかかわっていたことは言うまでも無い。従来の研究は、政治文化という側面や実際の政治あるいは軍事的局面で入市式が果たした役割を、王権の法制的経済的基盤の充足とそれを課せられる都市との関係から論ずるが、これは入市式の分析には有効な手段のひとつであった[5]。入市式についての資料も法制・経済史上の資料に語らせることが多く、たとえば図像資料といったものは参照項目に留まる場合が目立つ。しかし政治文化あるいは歴史意識の表れとして考察する際には、図像資料や他の非文献資料による部分を見過ごすことはできまい。

この入市式といった祝祭儀礼には、主催者による開催の記録である〈祝祭本〉が残されることが多い。この祝祭本は、誇張や架空といったバイアスがかかることは否めないが、祝祭儀礼の意図とその様相がテキストのみならず図像といった面から読み取れる貴重な資料であろう。祝祭本の多くは、これら重要な祝祭儀礼のスペクタクルを記録する為に製作された豪華な書籍の形を取る[6]。祝祭儀礼の企画全体の責任者である宮廷詩人や画家は、再度この祝典後の出版のために呼び集められ、莫大な費用をかけられ限定出版された。祝祭儀礼の主催者である支配者たちの力と富と権威の証明であると同時に宮廷のプロパガンダでもある。これらの記録のほとんどが、記録する役割を負った目撃者によって書かれているか、またはそれらの記録の集成であるということ点が重要である。祝祭本中に挿入された版画といった図像は、同時代の代表的な画家の手になり、建築家や舞台美術家を含む当日の参加者のデッサンを基にしている。

初期の祝祭本は短く、挿図なしというよりは控えめな記述で、なかには印刷されたテキストと後に木版になるが彩色された図像で出来ていた[7]。最初の重要かつ影響著しい例には、皇帝マクシミリアン 1 世によって 1508 年に構想され注文され、帝の死後 1526 年まで完成をみなかった祝祭本がある[8]。続いて 16 世紀初頭までに形式が確立し広まったフィレンツェのメディチ家の壮麗な祝祭のための長大な祝祭本のシリーズがあり、支配者への賛辞と挿図にあふれた非常に装飾的な祝祭の記述となっている[9]。これらの貴重な資料のテキストや図像は、このような祝祭儀礼がどのような意図でなされ、その記録を残そうとしたのかというこの時代の絶対王政につながる政治思想と歴史観を如実に物語っている。

c) 王権の祝祭

中世後期から近代初頭にかけて王侯の主催した祝祭の目的は、戴冠式、王家の婚礼、王嗣子の洗礼、臣従の誓い、都市への入城式、和平条約の締結や国葬などであった。贅沢かつ高度に組織化されたこれらの事業は、宮廷においては公開の娯楽であると同時に、王権の示威行為の場であった。中世以来の軍事教練的な色彩を帯びた馬上武芸試合（トーナメントやジュースティング）、あるいは軍事行進でもあった入市式などの行列儀礼[10] は、王権の伸張とともに中世末期以降には、プログラム全体と知的な内容を発展させた。ルネサンスという王侯の文芸保護

の賜物である文化や技術の成果を受けて、これはトータルなスペクタクルとして表現されるようになる。スペクタクルは、凱旋門の構築、行列（ページェント）の山車、シナリオ、コスチューム、劇場でのイヴェントの制作、音楽監督の指名といったあらゆる進行上の統括にあたる一人あるいはそれ以上の監督者（スーパーヴァイザー）の指揮の下、ありとあらゆる創作者個々人の共同作業の集成であり、総合芸術と呼べる祝祭の現出であった。

様々な部分に分けられるこのような祝祭には3つの基本的な要素があった。ひとつはページェントの山車を伴う凱旋行列としての入市式であり、トーナメント（馬上武芸試合）や技芸比べのような多彩な競技会であり、室内外の舞台での寓意と象徴に満ちた演劇的な出し物である。その他には、幕間劇（インタールード）を伴う宴会や、コレオグラフ（舞踏譜）をなぞる馬のバレエであるカルーセル（曲馬行列）、演劇〔後にはオペラ〕、舞踏会や仮面舞踏会（マスカレード）、時にはレガッタ（競艇会）や船遊び、花火も含まれた。これらの祝祭は2、3日から1週間、時には1カ月にもわたり、それらはまた数え切れないほど多くの音楽演奏の機会でもあった[11]。

このような祝祭は同時に教会儀礼でもあった。婚礼や戴冠式はキリスト教会の権威の下に挙行される儀礼であったし、入市式においては都市の首座教会においてミサが挙げられ、都市と王権の幸福な結託と平和が祈願される。このようなミサにおいては、聖書世界の理想都市エルサレムに響く音楽を模すべく、合唱とオルガンによるミサ曲とその祝祭の為に創作されたモテトゥスが演奏された。中世末までは王の支配下の都市への一連の入市式による巡幸は、徴税や裁判、認可など実質的な統治手段であるとともに、軍事・政治的勝利を示すための象徴的な王の認知や王の栄光の演出という要素も見て取れる。入市式の音楽は、まず行列の際のファンファーレで軍事的権威を、ミサにおいて政治的権威を演出していた。封建社会の王権にとっての諸侯諸都市との誓約という支配関係から、16世紀以降顕著となる絶対王政の官僚制あるいは中央集権の行政租税軍制システムにとって、このような入市式という儀礼は、スペクタクルという総合的な祝祭儀礼に変質する過程にあって果たしてどのような意味を持ち、その演出のひとつであった音楽はどのような機能を担わされ、どのような表象として同時代あるいは後世に意識されていたのだろうか。以下では「中世最後の皇帝」と称されると同時に最初の世界帝国の支配者、ハプスブルク家のカルロス5世の入市式をもとに考えていきたい。

2. 皇帝カルロス5世の入市式

a) 王子カルロスの認知

カルロス5世は、王宮に座し官僚機構をもって「遠隔」支配する中央集権の王の姿とは対照的に、自らが支配地あるいは他国、さらには戦地に赴き、軍事行政政治上の指示を「直接」下す、中世の封建領主以来の支配体制に準じていた。ハプスブルク家伝統の婚姻政策により継承拡大したその広大な版図ゆえに、カルロスの巡幸は生涯にわたり相当な距離を走破するものであった。その巡幸の中で繰り返し行われた入市式や2度の戴冠式のための祝祭儀礼は、カルロ

スの統治にとって実質的にも象徴的にも重要な意味を持っていたことはよく知られている[12]。

ここでは数多いカルロスの祝祭儀礼の中でも、彼の政治生命にとって重要な局面に催された、1515年4月18日のブリュージュへの入市式、1530年2月24日のボローニャでの教皇クレメンス7世による皇帝戴冠式を頂点とする巡幸と入市式、1549年9月10－15日の皇帝カルロス5世、王子フェリペ・デ・エスパニョール、皇帝の姉妹フランス王妃アリエノール、ハンガリー王妃マリアのアントウェルペン市への入市式の3つに如実に現れた王権·帝権の継承とその認知という局面と意図を持った祝祭儀礼をそれぞれで演出された音楽表象の機能を含め論じていきたい。

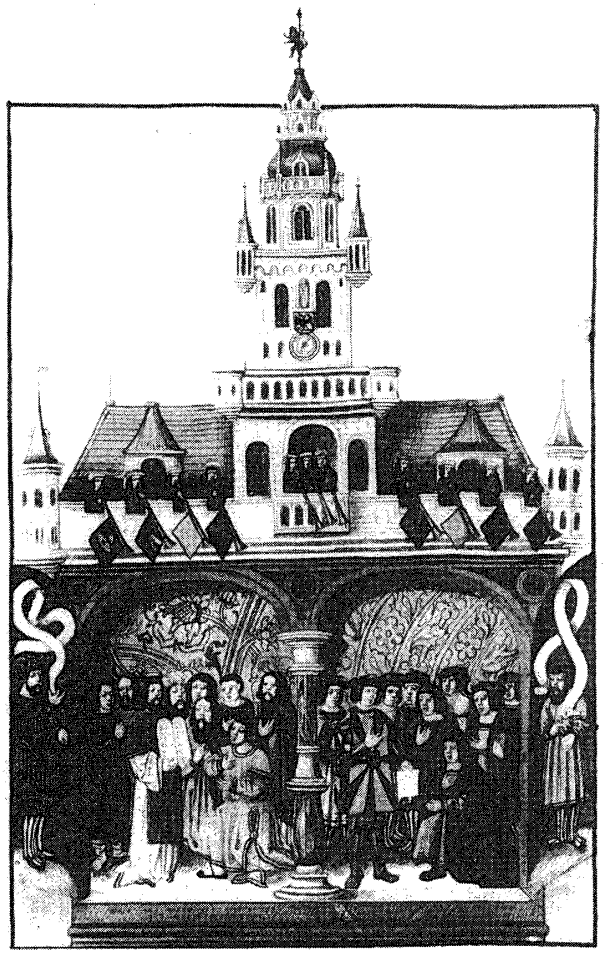
1500年2月24日にカルロス(1500-58)は、カスティーリャ王フェリペ美男王(1478－1506；オーストリア大公、ネーデルラント領主(1482)；アルトワ伯・ブルゴーニュ伯・シャロレー伯(1493)；ネーデルラント総督(1494)；カスティーリャ・レオン王(1504))を父に、ファナ(1479－1555；カスティーリャ・レオン女王(1504)、1506年フェリペと結婚)を母にフランドルのガンで生まれた。1506年父の死と1515年の満15歳を機とした成年式によってオーストリア大公、ルクセンブルク公のみならずマクシミリアン皇帝妃の祖母マリ・ド・ブルゴーニュより受け継がれたブルゴーニュ公領の君主となった。新君主としてカルロスはまず、諸都市の様々な代表者と徴税責務の代わりに特権や自由、身分の保証を確認する「臣従の誓い」のため、ルーヴァン、ブリュッセル、アントウェルペン、ミデルブルク、ガンに立ち寄り最後にブリュージュといった支配下のネーデルラント諸都市を巡幸した。1515年4月18日にフランドル伯として行われたブリュージュへの入市式は「喜びの入城 joyeuse entrée」としてレミ・ドゥ・ピュイによる祝祭本に記録されている[13]。

巡幸途上の各都市はこの若き君主を歓迎するために贅を競ったが、ブリュージュでは、かつてのブルゴーニュ公治下のブリュージュ市の繁栄と、その後の衰退、そして輝ける新しい君主カルロスのもとでの再生を主題とした入市祝祭が催された。凱旋行列の進路に沿って、11のネーデルラント諸都市の活人画、2つのアラゴンの、3つのハンザ諸都市の、7のスペインの活人画、海戦や攻城戦の模型像といった27の劇的な「活人画 tableaux vivants」が建てられた。活人画とは、様々な主題による一種の風景や群像を描いた舞台背景上に時には生きた役者が一場面を演じる、いわば映画のスクリーン上に映し出される寸劇のようなものである。入市式での主題は中世後期の聖史劇の影響を受け、王がキリストの新エルサレム入城を模して都市に入るなどと、この訪問に関連した歴史的事件に基づく旧約聖書や古典作品の情景を結びつけている。

カルロスは4月18日の夕刻にブリュージュに到着した。市門の鍵の譲渡儀礼を含む市門の外側での市長らによる挨拶によって始まり、その後市長らが先導し市庁舎へ長い行列(プロセッション)が行われた。行列は数多くの松明の灯に彩られた都市の主要な通りと広場を通過し、都市の見張り塔や市庁舎からは都市楽師たちがブジーヌ(ポザーヌ、後のトロンボーン)や布告用トランペットやS管のトランペットを演奏した。

「[都市のお歴々の] 後に、…若き皇太子のプロセッションがやってきた。最初は、随行の侍従武官。次は序列に従った高官たち。その後には数多の盛装した貴紳、侍従、役人たち。そのすぐ後には配下を引き連れた王家の家令が続く。その後からは徴税頭が配下を伴いやってくる。次には大臣とその役人たち。そのあとには [様々な] 身分の騎士たちが二人ずつの組で威風堂々とやってきて、それには司教たちや修道院長たちが付き従う。最後には皇太子が、声高く快く響くトランペットやクラリーノ (高音トランペット) の音を従え行進する。この凱旋門の正面や周りには 52 の松明が灯され、その松明には行進者の頭上への松脂の落下を防ぐために薄い支え皿が付けられている。」[14]

1 図：カルロスのフランドル伯としてのブリュージュ市への凱旋入城 (fol.8)：トランペット奏者が塔門から吹奏している



2 図：市庁舎での無言劇または「活人画」(fol.18)：「十戒」を幼児イスラエルに与えるモーゼ（左）と 1337 年にこの都市に諸特権を付与したルイ・ド・ヌヴェール（右）を描いている。(1, 2 図：Remy du Puys, *La Tryumphante et solennelle entrée*...(Paris,1515)：Bild-Archiv und Porträt-Sammlung, Österreichische Nationalbibliothek, Wien, [Bowles,1989] による)

b)「皇帝」イメージ形成への階梯

1516 年 1 月にカルロスは母方の祖父アラゴン王フェルナンドの死により、アラゴン・カスティーリャ王（在位 1516-1556）とナポリ＝シチリア王（在位 1516-1554）となる。レコンキスタの成就間もないスペインは、この若い他国ハプスブルクの王を戴くことに対し従順ではなく、カルロスは生地フランドルから 1517 年にはスペインへと統治のために移らねばならなかった。カスティーリャの首都バリャドリードでは入市の後、フランドルから引き連れてきた陪臣とともに親政を開始したが、1519 年のバレンシアでのコムニダーデスの乱をはじめとして、諸都市や諸侯の反発は大きかった。1519 年の 1 月 12 日には祖父の皇帝マクシミリアン 1 世が没し、叔母でネーデルラント総督のマルガレーテ大公妃の働きかけとのアウグスブルクのフッガーとヴェルザーの大商人の資金援助もあって 6 月 28 日、対抗馬のフランス王フランソワ 1 世を破り神聖ローマ帝国皇帝に選ばれた。戴冠式を帝国の古都アーヘンで挙げるための旅の途上、カレー南郊でイングランド王ヘンリー 8 世と名高いカン・デュ・ドラ・ドール［金張り陣

営（金襴の陣）］の会見を行い同盟を結んだ[15]。そして、10 月 22 日にアーヘンに入城し、翌日、アーヘン大聖堂にてマインツ大司教より塗油され帝冠を授けられた。この時、マクシミリアン帝に仕えた盲目のオルガン奏者アルノルト・シュリックが自作の〈クリスマスのセクエンツァ《Gaude Dei genitrix（喜びたまえ、神のみ母よ）》にもとづく 8 つの変奏曲〉と二重奏曲、オルガン曲〈われは父のもとに昇天す Ascendo ad patrem〉を演奏した[16]。

皇帝カルロスにとって、帝国の維持は内憂外患の日々の中にあった。内憂とは対マルティン・ルターとプロテスタント諸侯との諸問題であり、最大の外患はイタリアを巡るフランス王フランソワ 1 世との対立であった。1521 年には皇帝カルロス 5 世の召喚状に応え、ルターはカルロス臨席のヴォルムスの国会時に司教邸に出頭し審問を受けた。8 月にはルターはヴォルムス勅令により帝国追放刑に処せられた。 同年スペインではコムネロスの反乱と鎮圧。さらにミラノからフランス軍を駆逐するためにイタリア遠征をも開始した。

イタリア戦争の本格化に伴い 1522 年 6 月にはカルロスはロンドンに入市式を行い、ヘンリー 8 世と対仏同盟条約を結ぶ[17]。ミラノを巡る対仏戦争は 1525 年 2月 24 日のパヴィアの戦いにおける皇帝軍によるフランソワ 1 世を捕らえる大勝利と、1526 年のマドリード条約の締結、フランソワ 1 世とフランソワの 2 人の王子との人質交換によって収束するかに見えた。だが、すぐに条約は破棄され、フランソワは教皇クレメンス 7 世やイタリア諸侯とコニャック神聖同盟を結んでカルロス 5 世に対抗することになった。しかし、この年 3 月にはカルロスに、ポルトガル王マヌエル 1 世と母ファナの妹マリアの娘（カルロスの従姉妹）イザベラ（1539 没）と結婚という慶事も訪れた。皇帝カルロスが王妃とともに行ったセヴィリアでの入市式では、賢明、剛毅、寛大、平和、正義、信仰の美徳に献上された一連の記念門が設置されるなど、カルロスの不在時にはよくスペインを摂政したイザベラの政治的信条が祈念されていることが興味をひく[18]。1527 年のローマ略奪という身に降りかかった災い事があったにもかかわらず、カルロスの帝国統治は外交的には、教皇クレメンス 7 世とのバルセロナ条約と、フランソワの母ルイーズ・ド・サヴォワとカルロスの叔母にしてネーデルラント総督のマルグリット・ドートリッシュによって提唱された「貴婦人の和」と呼ばれるフランソワ 1 世とのカンブレ和約によって 1529 年には安定を見た。この機会にカルロスは、祖父マクシミリアン帝が果たせなかった夢を実現させ、皇帝の権威を世に知らしめようと企図した。教皇の手による皇帝の戴冠である。

ローマは略奪から未だ復興できずそのためボローニャで催されたカルロス 5 世の神聖ローマ皇帝への戴冠式は、1529 年 10 月 24 日から 1530 年 3 月 22 日にかけての一連の祝祭儀礼であり、その後には数多の都市を巡る数か月に及ぶ入市式の巡幸が行なわれた。この大巡幸には、イタリアでは 10、スペインでは 6、フランスでは 4、イングランドでは 2、そしてアフリカでの 2 つの入市式が含まれていた。「現世の神 Dominus mundi」としての役割を演じたカルロスのこれらすべての皇帝入市式は、古代ローマのカエサルの後継者としての皇帝を示威するものであり、皇帝の権威は当時では教会とその典礼による忠誠の擁護と異端の排除という権能に救

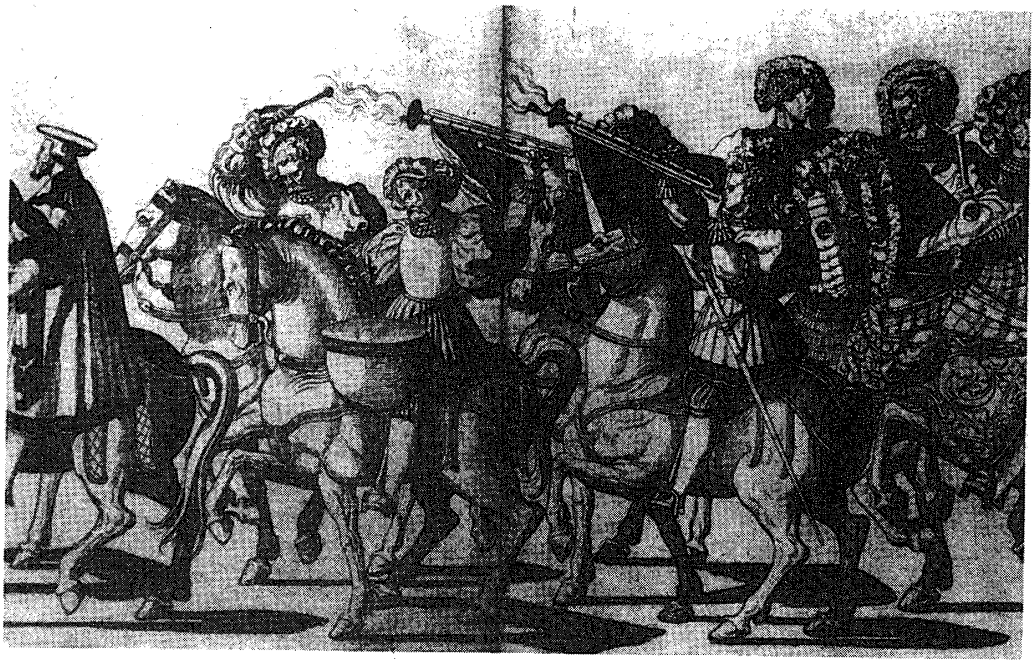
けられて確立していたことをも示すものであった。

これらの「大巡幸入市式 ingressi」の最初は、1529 年 10 月 24 日の教皇クレメンス 7 世のボローニャへの入城であった。教皇はマジョーレ門を通って讃歌〈テ・デウム〉を捧げるサン・ペトローニオ大聖堂まで行列（プロセッション）を行なった。その 12 日後 11 月 5 日に、カルロスは完全武装の軍を従えサン・フェリーチェ門を通りボローニャに入城した。この入市式と翌年の戴冠式はフィリドーニらの祝祭本などに記録されている[19]。皇帝は 400 の教皇護衛兵を従えた 20 人の枢機卿と合流した。300 の騎兵がプロセッションを先導し、それにスペインの貴紳の一団と武装した 300 の帝国直属騎士が続いた。戦車に積まれた 10 門の大砲が通りいっぱいに押し出し、ドイツの傭兵隊（ラントクネヒト）が鼓笛隊を伴いその背後に続いた。山車に乗った 2 人の貴族が帝国とブルゴーニュ公国の旗印を掲げた。その後にはいくつかの軍団が続く。そしてスペインの高官の一団は矛槍を持った 100 人の皇帝の親衛隊に守られて続いた。そして、帝国式部官が、金の鷲の飾りの兜などで完全武装した皇帝を先導した。徒歩の 4 人の帝国直属騎士がカールの頭上の天幕を支えていた。市門で、皇帝は彼に献呈された十字架に接吻し、帝国紋章官が群衆に 8000 枚のデュカート金貨や銀貨を投げ与えた。そして、いくつかの凱旋門を通って教会に進んでいった。これらすべては聖俗両界に威厳を示す皇帝としての予定通りの行動であった。明らかに、これらは教皇庁によって予め仕組まれており、教皇クレメンス 7 世はサン・ペトローニオ大聖堂にて皇帝足るべきものを待ち受けていた。

「（プロセッションの）最後には旗をデザインした流行の衣裳を身につけた美男の 6 人のスペインの旗手が続いた。皇帝が大広場に到着した直後に、軍隊トランペット、太鼓、トロンボーン、ショームそして大砲による大音響が鳴り渡り、この世の終わりがきたと思えるほどであった。一行はサン・ペトローニオ大聖堂の階段で降り、舞台へ昇っていった。」[20]

翌 1530 年皇帝の誕生日を意図して 2 月 24 日には、帝冠を伴った荘厳かつ祝祭的な行列がサン・ペトローニオ聖堂での戴冠式に向けて行なわれた。この大聖堂はローマのサン・ピエトロ大寺院と寸分違わぬほど飾り立てられていた。そして、教皇と皇帝はともに同じ天幕の下の馬に乗り、まずカルロスのローマ王としての戴冠式のためにサン・ドメニコ教会へ向かった。この教会の建物はローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ教会に似せて装飾を施されたものであった。

「偉大なるローマ教皇クレメンス 7 世は、見事な教皇のガウンを身に付け教皇冠を頭上に戴いていた…ローマ王にして皇帝のカルロス 5 世は、その威厳と荘厳さに相応しい上衣を纏っていた。彼の頭上には至高の宝石に飾られた至高の帝冠があり…見事な馬具を付けた馬に跨がり、左手には教皇を従え合い並び、同じ天幕の下で進んだ…数多の大司教と司教たちは長大なコートと聖職冠を身に付け、飾り立てられた馬具を付けた馬に跨がっていた。他にも司教以下の高位聖職者たち。トランペット奏者や皇帝直属のティンパニ奏者たちが続いた。」[21]



3 図：皇帝カルロス 5 世のボローニャ市における教皇クレメンス 7 世を伴った戴冠プロセッションのティンパニ奏者たち、ラッパ奏者たち（*La Magnifique et solennelle entrée et entrevue de l'empereur Charles V et du pape Clément VII* (Antwerp, 1530): The Miriam and Ira D. Wallach Division of Art, Prints and Photographs, The New York Public Library [Bowles, 1989] による）

4 図：神聖ローマ帝国皇帝カルロス 5 世のプロセッションの皇帝付きトランペット奏者とケトルドラム奏者（ハンス・ショイフェライン作、ヴォルフェンビュッテル、1525 年頃：Kupferstichkabinett, Herzog-Anton-Ulrich- Museum, Braunschweig, [Bowles, 1989] による）

皇帝戴冠式の大巡幸以降も、カルロスの入市式は続く。それは実質的な統治手段としての都市への訪問の結果であると同時に、皇帝の威光を諸都市の財力によって示そうとした王権の仕掛けでもあった。1532 年、ルター派プロテスタントのシュマルカルデン同盟諸侯とニュルンベルクの和約を結んで休戦した後の 9 月には、ウィーンに入市式を行い、1535 年には皇帝軍がオスマン艦隊を撃破しチュニスを奪還すると、10 月以降メッシーナ、ナポリ、ローマ、シエナ、フィレンツェ、ルッカなどのイタリア諸都市を巡幸した[22]。1538 年 6 月 18 日の教皇パウルス 3 世の調停によるニースでの休戦条約によってフランソワ 1 世と何回目かの和を結んだが、カルロスは翌年には皇妃イザベラを失い、また生地のガンの不服従による反乱に見舞われた。この反乱に対して、カルロスは姉アリエノール（エレオノーレ）が再婚し義兄となった宿敵フランソワ 1 世の歓待を受けつつ、ポワティエ、オルレアン、パリ、ヴァランシエンヌといったフランス諸都市に入城しながら軍事行動としての巡幸をスペインからフランドルに向けて行った[23]。1540 年この反乱を鎮めたカルロスは、ネーデルラント諸都市を叔母の後を受けて総督の任となった妹のマリアと巡り、さらにドイツからオーストリアのインスブルック、北イタリアへと巡幸を進めていった[24]。対オスマントルコとのアルジェの戦いでの敗戦の後、オスマン帝国と通じた宿敵フランス王との 4 度目の戦端が開かれた。戦いはヘンリー 8 世と対仏同盟を結んだカルロスが最終的には勝利し、1544 年 9 月 19 日のクレピーの和約で終結した。翌年オスマン帝国のスレイマン 1 世とも休戦したカルロスは外交上の安定を手に入れ、本格的に内政上の問題の解決に乗り出した。プロテスタント諸侯との対決である。1546 年 6 月に始まったシュマルカルデン同盟戦争は、ルター派でありながら皇帝に荷担したザクセン公モーリッツの功もあり、1547 年 4 月 24 日にミュールベルクの戦いで、ザクセン選帝公ヨーハン・フリードリヒとヘッセン方伯フィリップらのプロテスタント諸侯の同盟軍を破り、皇帝側の勝利に終わった。翌年 5 月にはアウクスブルク帝国会議で、カルロスは「仮信条協定（インテリウム）」を提出し、信仰問題をトリエント公会議に委ねることとした。晩年近いカルロスの最後の問題は、皇位を含めた継承問題であった。

c) 皇帝と王子の凱旋：王位継承イメージの形成

1548 年アウクスブルクにいた皇帝カルロスは嫡子フェリペ（フィリップ）をスペインからブリュッセルに呼び寄せた。1527 年生まれのフェリペはこの年 21 歳、スペイン王子にして父不在の際の摂政であり、将来は父の後を継ぎブルゴーニュ公となるべきスペイン・ハプスブルク家の継承者である。カルロスがフェリペを呼び寄せた意図には将来の総督としてネーデルラントでの王子の認知のためと、この時には次期皇帝はカルロスの弟オーストリア大公フェルディナンド（1531 年ローマ王に選出）に内定していたが嫡子に帝位を譲りたいがためのドイツ諸侯への下工作であったともいわれている。いずれにせよフェリペは 1548 年末にスペインから海路イタリアに上陸、ジェノヴァ、ミラノ、マントヴァ、トレントと北上し、ドイツ諸都市を経て、ブリュッセル、ルーヴァン、ガン、ブリュージュ、リール、トゥルネー、アントウェ

ルペンなどの帝国領の諸都市へと巡幸を行った。1549年9月10日には父の皇帝カルロス5世、叔母のフランス王妃アリエノール、ハンガリー王妃マリアを伴いこの巡幸の掉尾を飾るべく商都アントウェルペンにて入市式を挙行した。これに先立って1549年8月22日には叔母のマリアがネーデルラント総督として住み数年前に帝国に叛旗を掲げたガンとマリアのバンシュの居館を舞台に、フェリペを主人公としたトーナメント〈魔法の剣の数奇なる運命と幽き城〉を中心としたアレゴリカルなスペクタクルと宴会が繰り広げられている[25]。

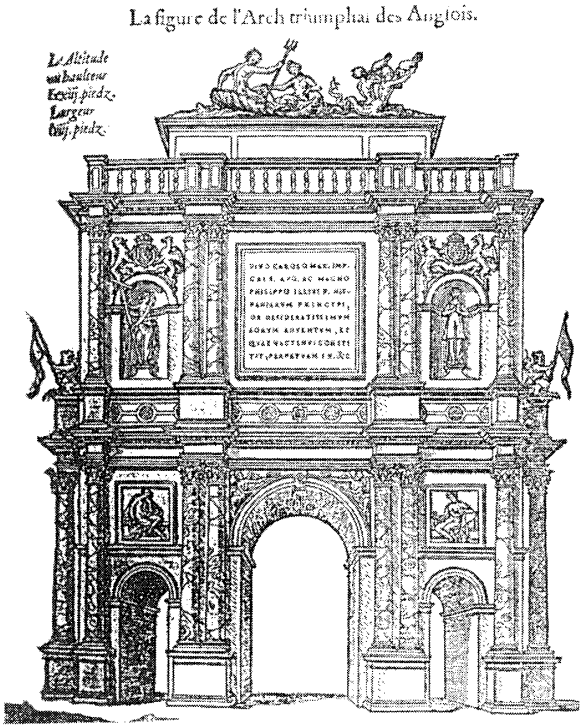
1549年9月10−15日の皇帝カルロス5世、スペイン王子フェリペ、皇帝の姉妹フランス王妃アリエノール、ハンガリー王妃マリアのアントウェルペンへの入市式の記録には、コルネリウス・スクリボニヌスによる祝祭本などがある[26]。9月10日は土砂降りの雨で、皇帝一行は市壁の外で、都市の役職者、商人、市民代表、正装で戦闘陣形を取った市民軍、多数の聖職者たちに迎えられた。アントウェルペン市内への凱旋行列は6人の鼓手と6人の笛手に先導され、案内役として3人の槍斧兵が立った。都市の代表者たちがその後に行進し、それぞれ固有の衣装をつけた商人組合の代表が続き、最後は市の役人であった。多くの貴族に囲まれた王子は豪華な衣装で騎行した。総計1726人の芸術家と職人が入市式の凱旋門、野外舞台、凱旋山車の製作に携わった。これらの凱旋門は皇帝の先祖たち、カルロスの征服地、教会と国家、そして王子の美徳を表す聖書や古典古代に題材を採った主題を描いていた。地獄の口にいるマルティン・ルターや異端を踏みつける「教会の勝利」の図像といった舞台立ては帝国に訪れる苦難の時の前兆であるかのように読み取れた。オスピタル通に架けられたスペインを表す凱旋門は大理石に見られるように塗られ、頂上部は聖堂のクーポラ（伽藍）の形で四隅にオベリスクを配した欄干が付けられていた。

「それぞれの塔には3人の鼓手と3人のラッパ手［が陣取り］、白と鮮やかな絹の豪華な衣装を身につけ、王子の到着の際には果てしないほどの大音量で演奏を始めた。」[27]

マルクト広場の東端にはイングランド商人たちが3つの門と、金で仕上げられた台座と柱頭の大理石の円柱を持つ73フィートもの高さの凱旋門を建造した（図5参照）。中央のパネルをはさんで両側の壁眼に置かれた2つの彫像はブリタニアとオケアヌスで、門の頂上には2人のトリトンが、大きなほら貝でできたトランペットを吹く2人の人魚に牽かれた貝殻に乗り海を漂っていた。「聖カテリーナの花嫁姿」を備え付けた都市当局による凱旋門は白い古代風のローブをまとい髪に花の冠をつけた演者を伴った。彼らは「歓喜」「快活」「快楽」「陽気」「歓楽」「万全」「幸福」「音楽」「調和」を象徴し、歌手と楽器奏者がここで「穏やかにまた巧みに5声部の歌を（この凱旋行列のわれらの王子を称えて、現地の言葉で）、ハープ、レベック、フィドル、リュートといったさまざまな楽器の伴奏で歌っていた」[28]。

アントウェルペンの中心のノートルダム教会にプロセッション（凱旋行列）がさしかかると、鐘楼の最も大きな鐘が、市民たちが王家の訪問者たちを見ている場所から行列に加わらないように合図として鳴り響いた。1000発以上の大砲が皇帝の祝祭を祝うために市壁に配置された。翌日、ミサに続いて、参列者全員は儀式のために市庁舎の大広間に参集し、その後武芸試合

（トーナメント）のため聖ミカエル修道院の敷地に集まった。豪華で洗練された宴会が続き、最後に果物の木々によって森の様に設えられたマルクト広場での夜のスペクタクルが行われた。ここでの精巧な花火はエデンの園のアダムとイブを表していた。多くの木像が金銀の煌きに覆われ、火薬でできたセルパン（蛇）などあらゆるものが精巧な花火の装飾で作られていた。



5 図：皇帝カルロス 5 世、王子フェリペ・デ・エスパニョール、皇帝の姉妹のフランス王妃アリエノール、ハンガリー王妃マリアのアントウェルペン市への入市式のために、イングランド商人によってマルクト広場に建てられた凱旋門。(Cornelius Scribonius, *La Tresadmirable, tresmagnifique et triumphonte entrée...* (Antwerp, 1550), The Newberry Library, Chicago, [Bowles, 1989] による)

この後皇帝カルロス 5 世が、息子のフェリペ 2 世にネーデルランドの支配権を譲ったのは 1555 年 10 月のことであり、翌年 1 月にはスペイン王位を譲り、9 月 12 日には荘重な退位式典と声明文をもってカルロスは神聖ローマ皇帝から退位し、弟のフェルディナントが神聖ローマ皇帝に、息子のフェリペがスペイン国王に即位することになった[29]。1557 年以降サン・イエロニモ・デ・ユステ修道院で隠棲したカルロスは 1558 年 9 月 21 日 58 歳で没した。カルロスの葬儀は 1558 年 12 月 20 日、ブリュッセルにおいて「国家の船」の葬送行列を含む儀礼として執り行われ、その後帝国領内の各地で葬儀式典が挙行された。

3. 記憶される音楽、記録される祝祭

a) カルロスの宮廷の音楽組織

16 歳のカルロスの 1515 年 4 月 18 日のブリュージュへの入市式の祝祭本にある、「この凱旋

の楽しみは、数多の楽器によって周囲に響きわたる豊かな音楽の調べに他ならない。」といった強い印象を受ける音楽についての記述や[30]、1530年2月24日教皇クレメンス7世によるカルロス5世の皇帝戴冠式の記述などあらためて見るまでもなく、カルロスの入市式にとって音楽は活人画や凱旋門といった視覚表現とともに演出の重要な要素であった[31]。

カルロスの音楽環境という面では、15世紀の音楽のみならず文化全般の中心であったブルゴーニュ宮廷の影響が見過ごせない[32]。父のフィリップ美男王は、その母マリ・ド・ブルゴーニュから継承したブルゴーニュ公譲りの宮廷礼拝堂付き聖歌隊（グラン・シャペル）にアレクサンダー・アグリコラ、ピエール・ド・ラ・リューらの優れた音楽家を加えた音楽組織を持っていた。1506年のフィリップの死後は、妹のマルグリット・ドートリッシュが幼いカルロスの摂政となった。1480年生まれのマルグリットは1483年から1491年までフランス王シャルル8世の宮廷で過ごし、1497年にスペイン王子フアンと結婚、フアンの死後1501年にはサヴォワ公フィリベルト3世と再婚も3年で夫を亡くし、1506年からネーデルラントの摂政となっていた。カルロスは1517年までの幼少年期にこの叔母のメヘレンの宮廷で養育された。高い教養を身につけていた彼女は、フィリップ美男王のオルガン奏者であったゴヴァルト・ネポティスから楽器を習い、声楽と鍵盤楽器演奏そして創作の才があったといわれている[33]。彼女の宮廷には、シャペルの長がマルブリアヌス・デ・オルト、オルガン奏者がアンリ・ブレドメーア、後にフローレンス・ネポティスで、ピエール・ド・ラ・リューも歌手兼作曲家として仕えていた。

フィリップ美男王は王妃ファナとの結婚に際し、自らの宮廷礼拝堂付き聖歌隊を1506年にスペインに同行させ、フィリップの死後も1508年まで王妃ファナと共に留まっていた。カルロスが1515年にブルゴーニュ公、1517年にスペイン王になりスペインに赴くと、このグラン・シャペルをも継承し、再びバヤドリードに引き連れていった。スペイン王カルロスの宮廷には、政治上の陪臣と同じくフランドルの合唱隊とカスッティーリャのビウエラ・デ・アルコ奏者という混合の陣容となった。カルロスはまたカスティーリャ王家の管楽器奏者の楽師団である「ミニストリレス・アルトス ministriles altos」も継承した。彼らはトランペットやショームといった管楽器で祝祭儀礼の際の奏楽に携わっていた。1519年の皇帝即位以降、「マエストロス・デ・カピラ maestros de capilla（聖歌隊長）」にアドリアン・ピカール、トーマ・クレキヨン、コーネリアス・カーニス、ニコラス・パイヤン、ニコラ・ゴンベールを配した。1526年に結婚した王妃イザベラも独自に聖歌隊員や歌手やアントニオ・デ・カベソンといったオルガン奏者などのスペインの音楽家を仕えさせていた。1555年の退位以降も隠遁先のユステ修道院でフアン・デ・ビヤマジョールといったスペイン各地から集めた修道士によるカピラを組織した。

1539年の王妃イザベラの死後、皇帝カルロスは王子フェリペと王女マリアとファナに亡き王妃の音楽組織を割り当てた。カベソンは一年の半分を王子に残りの半分を王女たちに仕えていたが、1543年にフェリペがスペイン摂政になると宮廷の拡張に伴いカベソンは王子専属に、

マエストロス・デ・カピラにガルシア・デ・バスルトが就いた。1548 年のフェリペのフランドルとドイツへの巡幸に際して、カルロスは王子の宮廷をブルゴーニュ風に改めた。このとき以降フェリペは皇帝と同じく、カスティーリャとブルゴーニュに 2 つの宮廷を擁した。

b) カルロスの政治的機会と音楽作品

1530 年のボローニャでの皇帝の戴冠式は、サン・ペトローニオ大聖堂でのミサを伴って行われた。このミサでは、1526 年以降宮廷カピラに歌手として仕え 1529 から 38 年まではマエストロ・ディ・カピラを勤めたニコラ・ゴンベール（1500 頃-1557）作曲の 5 声のミサ〈Missa Sur tous regretz（あらゆる悲しみで）〉が演奏された可能性が示されている。このミサ曲はヴェネツィアで楽譜出版業者スコットにより 1542 年に出版された曲集 « Sex missae cum quinque vocibus, Venezia » (G.Scotto, 1542) [RISM1542/2] に収録され今日に伝わっているが、写本で残されている別の版には「戴冠式のための」と記されているものもある[34]。ゴンベールは 1527 年のフェリペ王子の誕生に際して、4 声のモテトゥス〈Dicite in magni（偉大なものと呼ばわれん）〉（« Musica quatuor vocum…liber primus », Venezia: S.Scotto, 1539 所収）を、1531 年のカルロスの弟フェルディナント 1 世のローマ王への戴冠の際にも、5 声のモテトゥス〈Felix Austriae domus（オーストリアのフェリクス（フィリップ）の家）〉（刊本は現存せず、« N.Gombert: Opera ominia, ed.J.Schmidt-Görg, CMM, vi/10 » に所収）を作曲しており、さらに 6 声のモテトゥス〈Qui colis Ausoniam（イタリアに住む者よ）〉（ヴェネツィア 1549 年出版の曲集 « Il primo libro de motette a sei voce, da diversi eccellentissimi musici composti » (Venezia: G.Scotto 1549) [RISM1549/3] に所収）は 1533 年カルロスと教皇クレメンス 7 世のボローニャでの同盟成立の際歌われた記録があるなど、このようなカルロスの政治的機会に音楽を提供する立場にあったことがわかる。

また 1538 年のニースの和約のために、1538 年から 45 年までローマの教皇庁聖歌隊歌手であったスペイン出身のクリストバル・デ・モラレス（1500 頃-1553）が、モテトゥス〈Jubilate Deo omnis terra（すべての国々よ、主に向かいて歓呼せよ）〉（« Quintus liber motteorum ad quinque, et sex, septem vocum » Lyon: J.Moderne, 1542 に所収 [RISM1542/5]）を作曲した[35]。モテトゥスとは、このような政治的機会に際して挙げられたミサにおいて、ミサ曲とともに演奏されることの多かった多声の声楽曲で、このような場合には特に祝典モテトゥスと呼ばれ、聖歌から引用されたテノール声部の定旋律の上に、作曲家はこれらの機会にふさわしい歌詞を持ついくつかの上声部を作曲した。

1540 年 12 月以降カルロスの宮廷カピラに所属し、ピカールの後任のマエストロとなったトーマ・クレキヨン（1505-15 頃-1557 頃）が作曲した 5 声のモテトゥス〈Qui te victorem dicat（あなたを勝利者と呼べるのは誰なのか）〉と〈Carole, magnus erat（カール、彼は偉大であった）〉« Liber primus cantionum sacrarum ... quinque vocum » (Louvain: P. Phalese, 1554) RISM 1554/1 はカルロスとフェリペの 1548 年の巡幸に関連したものとされる[36]。この〈Qui te

victorem dicat〉の歌詞は、「あなたを勝利者と呼べるのは誰なのか、打ち負かされたあなたの敵によって自ら打ち負かされるあなたを、征服された敵が許しを請うと、無敵の皇帝よ。すぐにあなたはそれを許すが、その罪を思い出してあなたは苦しめられる。カールよ、敵はあなたに勝つことはない、あなたの責任感と理性があなたを勝たせる、あなたは自分を越えた勝利者だから。大いなる賞賛が敵に打ち勝ち、打ち負かされたものを許すが、自らの征服はより大きな栄光となるだろう。」で、〈Carole, magnus erat〉の歌詞は、「カール［シャルルマーニュ（カルロス大帝）］、彼は偉大であった（誰がそれを知っている）、このカールは、その運命が彼に大帝の名を与えた。しかしあなたは勝利に武器によって彼よりも偉大なので、世界の合意によって〈最大の〉という称号をもっている。けれども、神聖なる皇帝よ、これはあなたには不充分、敬虔であるということがあなたにははるかに大きな称賛だから。」とあり、機会音楽としての祝典モテトゥスの特徴をよく表している[37]。

皇帝カルロスは自らの「主題歌」を持っていた。といっても、皇帝と王子フェリペに仕えたルイス・デ・ナルバエスが、ビウエラ・デ・マーノ用に編曲したジョスカン・デ・プレの〈Mille regretz（はかりしれぬ悲しさ）〉（« Los seys libros del delphin », Valladorid, 1538 所収）が、「皇帝の歌 La canción del Emperador」と呼ばれて伝えられているからである[38]。一方、この原曲のシャンソン〈Mille regretz〉は、詩人ルメールのものとして 1533 年に、ジョスカン・デ・プレ (1450/55-1521) のものとしてはタブラチューラ譜で 1538 年、出版譜 « Trente sixiesme livre contenant 30 chansons. 4-6vv... le tout de la composition de feu Josquin des Prez » (Paris, 1549) で 1549 年に現れ、また作者不詳の曲としては数多くの写本やタブラチューラ譜に残されている。15 世紀末の最も名高い音楽家として知られていたジョスカンがルイ 12 世に仕えていた時代にかかれたシャンソンがその後多くの宮廷で愛好された結果、多くの楽譜資料に残されることとなった。またジョスカンは晩年に、カルロスの叔母のマルグリット・ドートリッシュと何らかの接点があったと推測されているばかりでなく、実は 1520 年に若きカルロスにシャンソン曲集を献呈したと伝えられている。この曲集は失われてしまったが、〈Mille regretz（はかりしれぬ悲しさ）〉がこれに含まれていたとしたら、カルロスが自ら「皇帝の歌」と呼ばせたかもしれない。

c) 戦争と平和の音楽

カルロスだけではなくこの時代の王侯にとって音楽は、教会においては祈りのための、世俗においては娯楽や教養のためのもの以上の意味を持っていた。音楽はある状況の演出のために感情に訴えかける効果的な手段であるという認識は十分にあったはずである。そこで、王侯の個人的な祈りの同胞衆であった宮廷礼拝堂付き聖歌隊は、警鐘や号令・合図といった軍事的な用途に始まった宮廷の管楽器奏者と同じく、祝祭儀礼といった政治的な用途で重要な役割を果たす。

カルロスの終生の好敵手フランス王フランソワも、皇帝の宮廷に劣らぬ音楽組織をもち、こ

れもカルロスに比して遜色ない規模で数多くの入市式を挙行したことは良く知られている[39]。フランス王の宮廷礼拝堂付き聖歌隊（シャペル・ロワイヤル）はムートン、ロングヴァル、セルミジを含む歌手や楽器奏者が属し、1518 年までに 23 人の歌手を 32 人に 1532 年には 35 人と拡張した。巡幸にはこのシャペルが随行したが、その上フランソワは巡幸先の諸都市の司教座聖堂や共同教会にまで注文を出すほど、祝祭儀礼での音楽には意識を払っていたといわれている[40]。16 世紀に始まった楽譜出版業をも奨励し、アテニャンやファレーズといった出版業者を擁するパリはこの時代の楽譜出版の中心地のひとつであった。高給で雇用するなど庇護された音楽家も、たとえばクレマン・ジャヌカンがイタリア戦争のマリニャーノ（ミラノ近郊）でフランソワ 1 世の大勝を契機に〈La Battaglia（戦い）〉と題されるパヴァーヌを作曲するなど、政治的機会を捉えて王に応えた。宮廷における祝宴の舞踏で演奏されたであろうこの種の戦争描写の音楽は「バッターリア」と呼ばれ、王侯にとっては自らの勝利の讃歌としてこの後 18 世紀まで愛好される。カルロス 5 世の祖父マクシミリアン帝の宮廷礼拝堂付き聖歌隊に仕えたハインリヒ・イザークも同種のバッターリアを作曲しており、王の栄光に満ちた戦争イメージの形成に寄与した音楽表象の例がみられよう。

ルネサンスと後に呼びならわされる文化の転換期において、皇帝や王が誰よりもまず文芸保護に努めた理由は、絵画や造形芸術のみならず、祝祭の情景や演出とその記念誌の充実といった視覚を通じた政治的表象の重要視にあった。それとともに祝祭の演出としての音楽への志向は、政治的演出にある一点においては確実になりえていた。特に「devotio moderna（新しい信心）」とよばれる新たなカトリック信仰の可能性が、カルロスの音楽表現のある種の好みを反映していた。異端審問所と苛烈な魔女裁判、保守的なスペイン・カトリックの風土、同時に新世界へ目を向ける進取の土壌の中で、生涯にわたり巡幸を繰り返したカルロスの入市式では、凄惨な戦争を思い起こさせる圧倒的な軍事力の誇示としての凱旋行列と、教皇庁を媒介として平和を求める政治的な意思を祈りこめるミサが同居していた。この軍事と政治の剛と柔の両面は入市式全体のスペクタクルによって演出される。カルロスの入市式における祝祭本のテキストや図像からうかがえる凱旋行列のミニストリレス・アルトスの管楽器奏者によるファンファーレ、教会の鐘楼から打ち鳴らされる鐘の響き、ミサにおいて宮廷礼拝堂付き聖歌隊が栄光を歌う祝典モテトゥスをはじめとするこの政治的祝祭儀礼で参加者が耳にする音は、まさに権威や栄光に満ちた皇帝のイメージを喚起させるための音であった。祝祭儀礼を通じてのこのような皇帝の政治的平和と軍事的平和の具体化に、視覚的芸術と同じく、音楽的表象は寄与した可能性を示して稿を閉じたい。

注

1) Burke, Peter, *Eyewitnessing: The Uses of Images as Historical Evidence*, New York: Cornell University Press/ Ithica, 2001.

2) Friedman, John B., & Wegmann, Jessica M., *Medieval Iconography: A Research Guide.* <Garland Medieval

Bibliographies, 20: Garland Reference Library of the Humanities, 1870>, New York/London: Garland, 1998.

3) Ellenius, Allain(ed.), *Iconography, Propaganda, and Legitimation.* (The Origins of the Modern State in Europe, 13th to 18th centuries, Theme G), Oxford: Clarendon Press/ New York: Oxford University Press, 1998. を参照。

4) 祝祭や祝祭本の主要な研究として以下を参照されたい。特に Jacquot, Bèhar & Watanabe-O'Kelly, Watanabe-O'Kelly & Simon は文献と資料の総覧である。Jacquot, J.(ed.), *Journeés internationales d'ètudes sur les fêtes de la renaissance,* 3 vols., Paris, 1956-75 [Jacquot]; Heers, Jacques, *Fêtes, jeux et joutes dans les sociétés d'Occident à la fin du moyen-âge,* Paris/Montreal: Institute d'études medievales 1971. [Heers]; Strong, Roy, *Art and Power. Renaissance Festivals 1450-1650,* Suffolk: Boydell, 1984（ロイ・ストロング、星和彦訳『ルネサンスの祝祭—王権と芸術』（2 巻）東京：平凡社 1987）[Strong]；Arnade, Peter, *Realms of Ritual: Burgandian Ceremony and Civic Life in Late Medieval Ghent.* Ithaca/NY/ London: Cornell University Press, 1996; Kipling, Gordon, *Enter the King: Theatre, Liturgy, and Ritual in the Medieval Civic Triumph.* Oxford: Clarendon Press/ New York: Oxford University Press, 1998.; Bèhar, Pierre & Helen Watanabe-O'Kelly, *Spectacvlvm europavm. Theatre and Spectacle in Europe/ Histoire du spectacle en Europe (1580-1750),* <Wolfenbütteler Arbeiten zur Barockforschung, Bd.31>, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1999. [Behar & Watanabe-O'Kelly]; Watanabe-O'Kelly, Helen & Simon, A., *Festivals and ceremonies: a bibliography of works relating to court, civic and religious festivals in Europe, 1500-1800,* London, 2000. [Watanabe-O'Kelly & Simon]

5) 近年にこのような視点の日本語による研究も出ている。小山啓子「近世初期フランスにおける国王儀礼の変遷—王位継承儀礼と入市式を中心に」、『西洋史学論集』36（1998 年）、19-40 ページ；梁川洋子「中世後期イングランドの国王入市式と王権」、『史遊』7（1999 年）、1-22 ページ；永井敦子「16 世紀ルーアンにおける総行列」、『西洋史論集（北大）』

6) Bowles, Edmund A., "Music in court festivals of state: festival books as sources for performance practices," *Early Music,* XXVIII/3 (2000), pp.421-443 [Bowles, 2000] や前掲 [Bèhar & Watanabe-O'Kelly, 1999]；[Watanabe-O'Kelly & Simon] を参照。

7) このような初期の祝祭本には、コンスタンツォ・スフォルツァとアラゴンのカミーラの結婚式：*Ordine de le noze de lo Illustrissimo Signor misir Constantio Sfortia de Aragonia,* Vicenza, 1475 や、後述の、スペイン王子カルロス（後の皇帝カルロス 5 世）のフランドル伯としてのブリュージュへの「喜びの入城 joyeuse entrée」：Remy du Puys, *La tryumphante et solnnelle entrée faicte ... en sa ville de Bruges,* Paris, 1515 [Remy du Puys]（彩色写本で 1 部残存、木版画付きの印刷版で数部残存）がある。

8) Marx Treitzsauerwein, *Kaiser Maximilian des Ersten...* (Augsburg, 1526). Bowles, E.A., *Musical Ensembles in Festival Books 1500-1800: An Iconographical and Documentary Survey.* Michigan: UMI Research Press, 1989. [Bowles, 1989] 中の図像と参考文献を参照。マクシミリアン 1 世の凱旋行列については、拙著『楽師論序説—中世後期のヨーロッパにおける職業音楽家の社会的地位』〈ICU 比較文化叢書 2〉、国際基督教大学大学院比較文化研究会刊、1995 の第 4 章「皇帝マクシミリアン 1 世のプロセッションと音世界の変容」も参照されたい。

9) [Bowles, 2000] によると、以降の大型の祝祭本は 1590 年以降に現れる。オーストリア大公エルンスト、アルベルト公子、イザベラ公女のアントウェルペン入城である。ミュンヘン、ドレスデン、

シュトゥッツガルト、ヴュルテンベルクといった宮廷のドイツ語の祝祭本も音楽と楽器を詳細に描いた記述と数多くの図版を含んでいる。18 世紀までにこのような国家的な式典はより大規模なものとなり、付随する祝祭本もそれにおうじて、特にフランスでの王家の戴冠式や結婚式用に制作されたものなど、大型になった。オーストリア女皇マリア・テレジアの治下の祝祭本も価値ある歴史資料である。ナポリのブルボン（ボルボーネ）家やサヴォワ家の宮廷祝祭を描いたイタリア語の祝祭本も同じく贅沢なものであった。

10) Barber, Richard & Barker, Juliet, *Tournaments: Jousts, Chivalry and Pageants in the Middle Ages.* Woodbridge (Suffolk): Boydell & Brewer, 1989; paperback 2000. に詳しい。特に 14, 15 世紀のフランドル諸都市におけるトーナメントなどの軍事的祝祭については Van den Neste, Evelyne, *Tournois, jotes, pas d'armes dans les villes de Flandre a la fin du moyen age (1300-1486).* Preface by Michel Pastoureau. <Memoires et Documents de l'Ecole des Chartes, 47>, Paris: Ecole des Chartes [Librairie H.Champion/ Librairie Droz], 1996. を参照。本稿執筆時には公開されていないが中世のトーナメントを描いた映画《A Knight's Tale（邦題：ロック・ユー）》(Sony Pictures Entertainment, 2001) も最近制作された。

11) [Bowles, 2000], pp.421-22. また以下の文献は資料紹介であるとともに多くの示唆を与えてくれる。[Bowles, 1989]; Kisby, Fiona(ed.), *Music and Musicians in Renaissance Cities and Towns*, Cambridge/New York: Cambridge University Press, 2001.

12) 以下の文献を参照。また、本稿でのカルロスの事跡や年譜に関してもこれらに拠った。Reifenscheid, Richard, *Die Habsburger in Lebensbildern: Von Rudolf I. bis Karl I*, Graz/Wien/Köln: Verlag Styria, 1982, 4 Aufl.,1990；上野健太郎『スペイン　ハプスブルク　カルロス五世の旅』東京：JTB、2000；藤田一成『皇帝カルロス 5 世の悲劇—ハプスブルク帝国の継承』東京：平凡社、1999；江村洋『カール五世—中世ヨーロッパ最後の栄光』東京：東京書籍、1992；アンリ・ラベール（染田秀藤訳）『カール五世』〈文庫クセジュ〉東京：白水社、1975；アーダム・ヴァントルツカ（江村洋訳）『ハプスブルク家—ヨーロッパの一王朝の歴史』東京：谷沢書房、1981 年。

13) Remy du Puys, *La tryumphante et solnnelle entreé faicte ... en sa ville de Bruges*, Paris, 1515. 注 7) を参照。

14) [Remy du Puys], fols.6ff, [Bowles, 1989] の英訳による。

15) [Strong] 2.vol., p.163ff.

16) マーティン・ピッカー（斎藤基史訳）「1477－1530 年のフランドルとオーストリアにおけるハプスブルク家の宮廷」イアン・フェンロン編（今谷和徳監訳）『花開く宮廷音楽』〈西洋の音楽と社会②ルネサンス〉（東京 1997)、279－80 ページ。同年カルロスは先帝マクシミリアン帝のヴィーンの宮廷カペッラに解散を命じている。

17) [Strong] 2.vol., p.163ff.

18) [Strong] 1 vol., p.148.

19) Gioacchino Filidoni, *Breve descrizione della celebre cavalcata eseguita in Bologna il di 24. Febraio 1530 per la Coronazione che fece di Carlo Imperatore il Sommo Pontefice Clemente VII...* (Bologna, 1530).；*La Magnifique et solennelle entrée et entrevue de l'empereur Charles V et du pape Clément VII* (Antwerp, 1530).

20) Marino Sanuto, *I Diarii*, ed. R.Fulin, F.Stefani, G.Berchet and M.Allegri (Venice, 1898), p.52: cols.184 and 264 ("La Intrada de Carlo V imperador in Bologna scritta per Antonio de Marsilio"), [Bowles, 1989] の英訳による。

21) Gioacchino Filidoni, *Breve descrizione della celebre cavalcata eseguita in Bologna il di 24. Febraio 1530 per la Coronazione che fece di Carlo Imperatore il Sommo Pontefice Clemente VII...* (Bologna, 1530), [Bowles, 1989] の英訳による。

22) メッシーナの入市式では、ポリドーロ・ダ・カラヴァッジョの立案で、皇帝の紋章とその両側に皇帝の標章であるヘラクレスの円柱を配した凱旋門が建造され建造され、11 月 25 日のナポリでの入市式では一連の巨大像（コロッシ）が建造された。翌年には新教皇パウルス 3 世の執行でローマでの皇帝カルロスの入市式が行われた。コンスタンティヌス帝の凱旋門、セプティミウス・セウェルス帝の凱旋門、ティトス帝の凱旋門を通っての行列には、教皇の甥アントニオ・ダ・サンガロが建築総監督を務め、頂部にローマが載ったサンガロ設計の記念門、ドメニコ・ベッケ フーミ作のカール騎馬像をはじめ、ヴァザーリ以下の芸術家参加による最大規模の象徴的なペ ージェントが繰り広げられた。その後カルロスはシエナ、トスカナ大公アレッサンドロ・デ・メディチの歓待を受けたフィレンツェ、ルッカへと巡幸した。([Strong] 1 vol., p.179-84)

23) [Strong] 2 vol., p.163ff. その後 1540 年 1 月 20 日のカンブレでの入市式ではジャン・クルトワの祝典モテトゥス〈来たれ、地の民よ Venite populi terrae〉が演奏された。([Bowles, 1989] p.34)

24) [Strong] 2 vol., p.163ff.

25) カルロス 5 世の妹ハンガリー王妃マリアによるガンにおけるバンシュでの祝宴は、ガンでの前夜祭で、大宴会の終りに騎士が皇帝の前に登場し果し状を留める権利を請い、宮廷は出来事を確かめにバンシュへの出立に始まった。8 月 22 日に皇帝と宮廷がバンシュに到着すると歩兵戦の夕べが行われ、翌 24 日には宮廷舞踏会と、野人たちが貴婦人を近くの砦へ幽閉し、皇帝の高潔な家臣を「幽き城」に幽閉している魔法使いノラブロックと対決の助力を請う皇帝への遍歴の騎士たちからの手紙が届けられるという舞台仕立てで、いよいよ 25、26 日には馬上武術試合〈魔法の剣の数奇なる運命と幽き城〉が開催された。善良な女王ファダデの「幸運の島」の 3 本の巨大な円柱に刺さる剣と予言によって、幽き城から救出できるが、幸運の島に着く前には「幸運の難関」での赤いグリフォンの騎士との戦い、「危険の塔」での黒い鷲の騎士との戦い、金色の獅子の騎士との戦いに勝利せねばならない。ハンガリーの騎士、太陽と月の騎士、白薔薇の騎士、死神の騎士といった扮装の騎士が挑戦し敗れる中、フェリペ王子扮するベルテネブロスと名乗る騎士が成功し、大団円を迎える。([Strong] 1vol., p.199ff)

26) Cornelius Scribonius (Schrijver), *Le Triumphe d'Anvers, faict en la susception du Prince Philips, prince d'Espaigne,* Anvers 1549; Cornelius Scribonius, *La Tresadmirable, tresmagnifique et triumphante entrée...*, Antwerpen 1550, fols.6, 18v, 32v; [Bowles, 1989], [Bowles, 2000] § 28 を参照。

27) Cornelius Scribonius, *La Tresadmirable, tresmagnifique et triumphante entrée...*, Antwerpen 1550, fols.6, 18v, 32v; [Bowles, 1989] の英訳による。

28) *Ibid.*

29) この辺りの事情は、藤田一成『皇帝カルロス 5 世の悲劇』に詳しい。

30) [Remy du Puys], fols.6ff, [Bowles, 1989] の英訳による。

31) たとえば、以下のようにカルロスの生涯を音楽でつづった演奏といった試みがなされている：
« Carlos V, Mille Regretz:: La Cancion del Emperador. Luces y sombras en el tiempo de Carlos V », played by La Capella Reial de Catalunya & Hesperion XXI, dir.: Jordi Savall, Alia Vox, 2000；« Carolus Maximus. Musik im Leben Karls V. », played by Pomerium, dir.: Alexander Blachly, Hamburg: Pure

Classic, Glissando, 2000 （日本語版: Victor Entertainment, 2000）

32) Richard Schaal, Martin Picker, Luis Robledo, Steven Saunders, and Bruce Alan Brown, "Habsburg," from volume 10 of *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, edited by Stanley Sadie, Second edition, London *et al.*: Macmillan, 2001 [NGD 2nd ed.]

33) マルグリットの宮廷の音楽事情については、Greta Moens-Haenen(ed.), *Muziek aan het hof van Margarethe van Oostenrijk/ Music at the Court og Marguerite of Austria, Jaarboek van het Vlaamse centrum voor oude muziek,* Jaargang III (Peer, 1987) が詳しい。マルグリットは兄フィリップの死に際し、ピエール・ド・ラ・リューあるいは彼女の作かもしれない兄のフィリップへの哀歌 <Se je souspire/ Ecce iterum> を捧げた。彼女のポートレート付きのシャンソニエ（歌謡写本）、宮廷礼拝堂で用いられていたコーアブック（聖歌集）写本、ラ・リューのミサ曲〈O Gloria domina〉を含む教皇レオ 10 世に贈られ彼女の紋章の装飾があるコーアブック（聖歌集）写本、などの音楽写本の蔵書がメヘレンの宮廷の図書館にはあった。

34) George Nugent & Eric Jas, "Gombert, Nicolas," in 10 vol. of [NGD 2nd ed.] 印刷譜については以下を参照。Bernstein, Jane A., *Print Culture and Music in Sixteenth-Century Venice*, Oxford/New York *etc.*: Oxford University Press, 2001

35) Robert Stevenson & Alejandro Enrique Planchart, "Morales, Cristobal de," in 17 vol. of [NGD 2nd ed.] カルロス 5 世の死の翌年 1559 年にメキシコでおこなわれた記念のミサで、モラレス作曲の〈Missa pro defunctis（死者のためのミサ曲）〉(« Christophori Moralis Hyspalensis Missarum liber secundus », Roma: V. & L. Dorico, 1544 所収）と 5 声のモテトゥス〈Circumdederunt me gemitus mortis（死の悲しみが我を取り巻く）〉（トレド大聖堂蔵 21 号写本に所収）が演奏された。

36) Barton Hudson, & Martin Ham, "Crecquillon, Thomas," in 6 vol. of [NGD 2nd ed]

37) いずれの歌詞も今谷和徳氏訳 [Carolus Maximus] による。

38) Hopkinson K.Smith & John Griffith, "Narváez, Juan de," in 17.vol. of [NGD 2nd ed.]

39) 前掲、小山論文、永井論文、[Strong] に詳しい。

40) Frank Dobbins, "François I," 9. vol. of [NGD 2nd ed.]